慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	2019年度藝文学会シンポジウム「詩とその活用 : 5カ国篇」 : 質疑応答
Sub Title	Discussion
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.92 (151)- 100 (143)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度藝文学会シンポジウム「詩とその活用 : 5カ国篇」 開催日: 2019年12月13日 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール・ 東館5階
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

質疑応答

司会　佐藤道生：私を含めて五人ですけれども、お話をうかがい大変勉強になりました。川口先生のお話で、抒情詩が 12、13 世紀に始まって、14 世紀には衰退してしまうという点は非常に面白いですね。実は私がお話しました、七言律詩の尾聯で述懐するという形式も実は平安・鎌倉時代だけで、それ以後は無くなるんですね。そういう作り方がまったく為されなくなるということで、その点ある種の共通点を感じて大変面白く拝聴しました。髙橋智さんの、これは詩を作った本人が註を加えているという、詩といっても、かなり上質の文化史が詩に託して語られているというところですね。それから髙橋勇さんの、クリスチャン・ロックの歌詞に教義の違いも見られるということも面白いですね。それから識名さんからは、東ドイツ出身者のなかでナショナリズムが芽生えるときに中世が流行るという興味深いお話がありました。皆さまそれぞれにお感じになったことがあると思います。五人の話をお聞きになったどなたでもご発言いただければと思いますけれども、まず巽先生に口火を切っていただければと思います。

巽孝之：大変面白いシンポジウムで、本当に五ヵ国でバラエティがありました。特に高橋勇さんと識名さんがお二人ともロックを扱われたというのが非常に意外で、大変面白いことでしたね。私は一応宗教上ローマ＝カトリックなのですが、私の記憶では 70 年代くらいからミサをロックでやるロック・マスという形式とか、琴でやるミサなど実験的なものが導入されました。賛美歌もそういう新しいもの、日本オリジナルの賛美歌がたくさん出てきたのを記憶しています。あとフォークソング、ギターでやるフォーク･マスというのもあったんですね。だから、おそらく 60 年代の影響でカトリック教会もどんどんそういうのを取り入れていった。だけど、一方では遠藤周作の『沈黙』とか『死海のほとり』は絶対に許さないという、宗教上の堅いタブーは依然としてあったと思うので、その点も今日のお話と絡んで面白かったです。それから識名さんのお話の中世ロックは衝撃で、

私はプログレッシブ・ロックで本を書いている人間なので、そのあたりも本来は知らないといけないのですけれども。イギリスではグリフォンとかルネッサンス、あとストローブスですね。古楽器を使ったロック、しかも一番最初のグループでしたかね。Svbway To Sally が歌っているのはものすごい変拍子で、プログレッシブだなと思いました。それも 90 年代から出てきたのがまた面白いところで、あの手の音楽はどちらかという 70 年代。だからそういう大きなサイクルでリバイバルしているような感じがしたのがちょっと面白い。ただ、ファッションと音楽が私の中であまり一致しなくて、あのファッションはどちらかというと 60 年代から 70 年代にかけてのブラック・サバスとかに近い。ゴシック・ロックとありましたけれども、最終的には KISS など悪魔的なものにいくので、ロックというジャンルには絶えず悪魔崇拝的なところがある。ローリング・ストーンズやレッド・ツェッペリンにもあるし、それからジミー・ペイジはアレイスター・クロウリーの愛読者だった。ファッションはそう見えるんですけど、歌っている内容は割と穏やかで、むしろフォークソングと言ってもいいような世界ですよね。そのちぐはぐさを非常に面白く聴きました。ただ識名さんの注釈にもありますが、あの人たちはゲーテとかフケーとかを本当に読んで反映させている？

識名章喜：読んでいるかどうか確認はできませんけれど、あの使い方をするのはある程度知識が無いと（できない）と思うんですね。ゲーテの『野ばら』は皆たぶん知っていると思うのですが、小学校あるいは中学校レベルの教育でやってきた知識を入れているんじゃないかと思っています。

巽：別に意識しているわけじゃなく、自然に？

識名：自然に。でも例えばフォーゲルフライ（Vogelfrei）の「シャントマウル（Schandmaul）」なんかは、明らかにロマン派を読んでると言えますね。

巽：ええ。さっきの言葉遊びからして、非常に詩が凝っているわけですよね。それは大変啓発されるところで、今日は独文と英文がロマン派のご専門ですが、その詩の現代的な表れがロックンロール以後に出てきた。だから現在詩を非常にビビッドに感じることができるというのは、ロックミュージックが外せなくなっているのかなと。ロックは割と音そのものとかリズムで語られることが多くて、ロック批評とか見るとあまり詩の内容を語っている人はほとんどいないですよ。だけど詩がそういう音楽にのせて流通していくのはやはり一つの普及の形態としては外せないのかなと。そういうことをお二人の話を聴いていて実感した次第です。

長くなりましたが、以上です。

佐藤：ありがとうございます。

フロア１：私も識名先生の最後のまとめのところに興味があります。先生のお考えでは中世の再発見だとか、ロマン主義への郷愁、ノスタルジーのようなものが、現代のRPGだとか、そういうものに乗っかっているというお話だったのですが、そういった認識は、そもそも批評などで一般的にある程度共有されているものなんでしょうか？ある程度ノスタルジアとかリバイバリズムみたいなものは時として出てきたりするとは思います。その過程でテクストとかシンボルとして都合よく再編集されて、煽動的に利用される場面というのは往々にしてあったと思うんですが、もしその辺まで少し踏みこんでお話いただける部分があればお願いしたいと思います。

識名：ありがとうございます。これはなかなか微妙で、ドイツのロックシーン、あるいはドイツのポップミュージックの人たちは、日本の歌謡曲と同じで、人畜無害な耳に心地よいポップスの世界と、それからもう一つ、必ず社会批判を込めて､それで賞をもらったり広範に人気の出てくるグループなり個人なりがいます。それは明らかに、例えば難民問題とか移民問題とかそういうようなことも扱うような歌詞を入れる。ところが、この中世ロックグループは本当にロマン派の語彙によって、先ほど巽先生がご指摘されたように、音楽とちぐはぐさがあるような割とベタな語彙を使っています。先ほどのRPGへの影響はあくまで私の仮説なので、まだ誰もそこまでは検証はしていないんですけれども、ファイナルファンタジーなどの日本のRPGモノがドイツの市場でもものすごい売れているんです。だから、そういうのとも少し関係があるんじゃないかと。先ほど言ったように、これが社会にどういう影響を与えるのかまではなかなか見通せないところがあります。けれども一つ気になるインタビューがあって、あるロックグループがドイツの大学の学園祭で招待を受けた。大学の招待を受諾したんだけれど、ところが問題はその大学の学生委員自治会がこのグループの歌詞を全部詳細に分析して、このグループは女性が歌っているのに非常に女性差別的だということを言われたと。それにむっとしたということをヴォーカルの女性メンバーがインタビューで答えたことがあります。今のドイツの大学はリベラル左派の牙城ですから、ああいう中世ロックグループの歌詞にひっかかりを感じる人たちがいて、反対するというのがあるみたいですね。先ほど巽先生があの黒い格好でちぐはぐさが目立つ

とおっしゃっていましたが、昔からあった英米ロックを真似ているんではないかということもあったんですけれども、今ドイツで黒い格好でブーツを履くとなるとネオナチなんですね。ある意味でネオナチの格好なんだけど、もちろん彼らはそうじゃなく、ああいう黒を強調していく。しかもドイツ語となると、この人たちは右だな、という見方をされるのはあるんですよ。

フロア１：補足をいただきありがとうございます。逆にそういうリスクを冒してまで彼らは、そういうパフォーマンスをすることに意義を感じているという理解になるんでしょうか。

識名：それはないです。全く政治性がないんですよ、彼らの歌詞には。これは本当に特徴的で、全く政治性が無い。それを読み取るのはあくまで我々、ドイツ文学とかやっている人たちはそのように解釈しちゃいますけれど、他意は無い。最後に紹介した曲はユニバーサルミュージック傘下のレーベルから昨年発売されてます。政治的に危ないグループはそういったユニバーサルの傘下の配給会社がCD 化することはないと思いますので。

フロア１：分かりました。ありがとうございます。

佐藤：ありがとうございました。荻野先生、お願いします。

荻野安奈：仏文の荻野安奈です。二つおうかがいしたいことがあって、一つ目は佐藤先生で、大変とんちきな質問で申し訳ないのですけれども、尾聯の例が四つありまして、述懐について見ていくと、四つのうち三つまでは、息子及び自分の出世をお願いするという全く同じ目的を目指しているわけです。この三人の中で誰が望みを達することができるのか。詩の技巧がそれに関係してくるのかどうか、ということをちょっとおうかがいしたいと思います。

佐藤：ありがとうございます。つまり、結果ですね。実はたぶん、何人かは詳しく検証できるのですけれども、願いを叶えています。願いが叶えられた詩だからこそ『本朝麗藻』に採られたのですね。今見た三人が不遇をかこっているということでしたが、それ以外の詩人は当代を言祝ぐ、一条天皇を称えるという述懐です。わざとこの三首を載せたのはそういう、述懐の本来の傾きが見て取れるということで、ここに挙げました。

荻野：分かりました。そういたしましたら、この述懐の本懐を遂げた人たちの背後には、駄目だった人の死屍累累の山があるわけですね。

佐藤：その通りです。ありがとうございます。

荻野：すっきりいたしました。あと、二つ目で佐藤先生がおっしゃっていた日本文学は「座の文学」であるという点で、フランス文学もまさにそういう側面があるなと思うんですけれど、すぐ思い浮かぶのは 17 世紀の社交文学の中で詩がプレゼントのようにやりとりされていた。中世にも当然そういう側面があって、歌会合わせや論争詩があったと思うんですけれども、フランス中世文学の「座の文学」的なところを、川口先生にお教えいただきたいなと思います。

川口順二：ありがとうございます。ただ、まず南仏という言葉自身がフランスの一部という感じがして、ちょっと問題があるような気がするんですけれども。それはそれとして、詩人には二つあって、恋愛詩に関してはおそらく自分で作って、それを自分で歌ったりもしくはジョグラールに託して歌わせるとかそういうことはあるわけで、そこは比較的孤独の部分があると思います。ただそれとは違うのが partimen、要するにやり取りがありますね。こういう中で、二人の詩人が参加してやりとりをするというタイプの作品は残っております。これは座といえるか分かりませんけれど、ただしこれはいわゆる恋愛詩ではなく、むしろ論争の類であると思います。

荻野：ありがとうございます。

佐藤：どうもありがとうございます。

フロア２：本日はありがとうございました。識名先生に事実確認的な質問が一つございます。ライプツィヒには、ゴシックの格好をした女性とか男性とかいわゆるコスプレをする大きなお祭りがありますよね。あれも東独の、近年はとりわけユースカルチャーとして注目されているところがありますが、それと今回の中世ロックは、文化的な総体の中で関係性が具体的に見出せることはあるんでしょうか。

識名：ありがとうございます。僕もライプツィヒのコスプレショーから帰ってきた女子中学生を市電の中で見かけたことがあります。私が当時ドレスデンに住んでいた時に、子どもたちがその格好をして、市電の中でも日本のアニメとかの格好をしているんですけれども、それとこの中世ロックとはあまり関係は無くて、ただ日本のアニメとかゲームの世界はじわじわと広がっているとは言えるかと思います。

フロア２：ということは、文化が逆輸入されているというか、文化的なイメージがそういうところにある程度輸出されて、それがサブカルチャーとして新しく見

出されているというような流れになるのでしょうか。

識名：その相互作用があるかどうかまでは、僕も分かりません。本当にやるんだったらそのグループに直接聞くしかないですけれど。今のところ直接日本のサブカルチャーの影響が中世ロックとかの動きに関係しているかというと、そこまでは言えなくて、ただ先ほどRPGと言ったのは、中世を舞台にしたロールプレイングゲームが日本でもたくさん作られていて、それが世界中に輸出されているという事実があるので、仮説を示したにすぎません。

フロア２：ありがとうございます。

フロア３：お話ありがとうございました。佐藤先生に質問で、中国から漢詩が来て、述懐が日本ならではの形になっていったというのが面白いと思いながら聞いておりました。先ほどお話されていたように、鎌倉・平安で述懐は終わったというお話だったんですけれども、この述懐が消えてしまったのは何でなのかなということについて教えていただきたいと思います。

佐藤：それは私も疑問に思っているところなのですけれども、先ほど髙橋智さんが紹介してくださった『詩経集伝』にもありましたけれど、詩は本来「言志」、つまり志を言う詩なんですね。それが矮小化されて、尾聯にのみ述懐が閉じ込められているというようなことになりました。実はですね、七言律詩で詩をつくるのは大変珍しいことで、南北朝・室町になりますと日本では七言絶句でしか詩を作らなくなるんですね。これ、今私がお話した平安時代の詩の特徴は遣唐使が廃止されて以後、つまり中国から学問的な成果が入ってこなくなってから、その直後に始まった日本独自の作り方なんですね。中世になりますと今度は中国との交渉、交流がかなり盛んになって、室町時代は日明貿易とか、五山のお坊さんも頻繁に中国に渡ったり、向こうから来たりで、鎌倉時代の終わりごろからそういう変化が現れて七言律詩が日本で詠まれなくなってしまう。もちろん例外的に作られることはあるのですけれども、七言絶句あるいは五言絶句に移行するというところから、述懐というものが規則としては無くなってしまうということなんです。そのくらいしか、答えとして用意できないんですけれども。なので、中国からの影響のある間は中国の詩の詠み方というものがお手本として入って来るんですけれども、そこから鎖国時代に入ると、つまり平安時代あるいは江戸時代もそうですけれども、中国からの影響がシャットアウトされたところで、日本独自の詩の詠み方が生まれたということだと思います。

フロア３：ありがとうございました。

佐藤：詩人の先生がいらっしゃっています。朝吹先生、何かありましたらひとことお願いします。

朝吹亮二：わたくし本塾仏文の朝吹と申しますが、巽さんと同じで、格好の割に穏やかな音楽だなと思って聴いていました。中世の詩を音楽、といってもクラシックですけれども、カルミナ・ブラーナが現代クラシックに中世の詩を適応したのが面白いなと、それとドイツの関係もあるのかなと思って聞いていました。「詩とその活用」ということで川口先生に、必ずしも質問というわけでもないのですが、偶然今ジャウフレ・リュデルの「遠くから」という詩を訳している最中で、非常に難しくて。そもそも私は中世フランス語あんまりよくできないので、現代語訳から訳しているのですが、中世フランス語の語順で現代語訳されているから、途中で意味がはぐれてしまうような詩の書き方がされている。さきほど川口先生もシンタックスが複雑になっているというお話もあって、例えば現代の詩とどういう関係があるのかコメントいただければと思います。

川口：ありがとうございます。リュデルですけれども、トルバドールに関しては大きく三つに分ける伝統があります。軽い、豊かな、閉じられた、という。「閉じられた」というのが一番難しく、先ほどのアルナウト・ダニエルは典型的な例です。それに対してジャウフレ・リュデルの場合は、どちらかというと軽い、比較的読みやすい。確かに音をとっても、アルナウト・ダニエルは耳に硬い音がたくさんある。まさにそういうものを集中して詩をつくるという非常に面白いことをやっていて、だからなのか非常に読みにくい時がある。意味も分かりにくいとか、シンタックスも非常に自由奔放に書いているなという部分があります。それに対して、リュデルは一見比較的分かりやすいような気がするのですけれども、実はトルバドールの詩を読んでいて一番困るのは語彙、言葉の意味が非常に広いんですね。一、二、三、四、五という風に、全然関係ないような意味が、辞書を見ると並んでいるようなことがあって。そうすると、実際の詩で出てくる言葉をどういう意味で使うのかというのは、これはもう解釈がどうしても入ってきます。それを申し上げた後で一つ言えることは、早稲田大学の瀬戸直彦さんという方が、彼は日本の南仏文学の恐らくは第一人者と言えると思うのですけれども、彼が少し昔に『トルバドゥール詞華集』を出していて、これは原文とその対訳を出しています。いくつかコメントもありまして、この本は簡単な文法の説明などもあり

ますので、それを参考になさるといいかなと思うというのが一つ。それから、このリュデルに関しては、非常にたくさんの研究があるわけですけれども、翻訳に関してはどちらかというと英語の翻訳にやはりいいものがいくつかある、ということが言えると思います。先ほど申しましたように、リュデルの詩を集めても、八篇くらいしか分かっているものはないんですけれども、それに関して様々な英語の訳、ドイツ語ももちろんありますけど、そういうものがきっと参照になるといいかと思います。

佐藤：どうもありがとうございます。

識名：一つよろしいですか？　髙橋智先生が、先ほど「藏書紀事詩」の二番目に挙げられていた人物なんですけれども、全部の本を暗記するくらい夫婦で集めて、それが戦乱の中でどんどん無くなっていくということでしたが、当時の中国大陸での戦争では本までみんな焼いちゃうわけですか？

髙橋智：ええ、ことごとく。

識名：それは、本が財産で、それをぶんどるんじゃなくて、何故焼いてしまうのか？

髙橋智：実際に焼いたかどうかわからないんですけれど、よく「焼き尽くした」と書かれているんですね。あるいは捨てられたか。いずれにしても、大体記述には「焼かれた」、「灰燼に帰する」とあります。大体、焼かれるようですね。もちろん例えば漢の時代、武帝が秦を制圧するときには、本は焼かずに文書を全部、接収したと。それによって漢の帝国は何百年も続いたとよく言われるんですね。ですから、実際どういうものか分かりませんけれども。王朝が変わるときには、必ず前王朝の文物を焼き尽くすのが一応原則になっているようです。ただ、この北宋が女真族の金に制圧される場面ですけれども、金が北宋を攻めるときに北宋時代の書物は灰燼に帰したというのは、非常に象徴的に中国では言われるんですね。ですから、北宋の時に残っていた本はすべて金によって無くなったと言われるんです。ですから、南宋時代になって杭州に都が移ってから本の文化が復活したと言われるものですから、おそらくこの超明誠の話に、戦によってどんどん本が焼かれてしまったという歴史的事実が関連すると思うんですね。中国の記述というのはやはり漢民族中心に書かれることがありますので、おそらく金が北宋を滅ぼす、北方の民族に滅ぼされたということはかなり強調して残されることがあります。そういうこともあって、こういう人たちの伝記には金に滅ぼされ、全部焼き尽くされたというように書かれるんじゃないかと思いますね。実際これは北

宋・金の時代ですけれども、近代になって清朝の図書を、フランスとかイギリスが焼き尽くしたんですね。円明園という離宮があったんですけれども、そこにあった本を全部焼いた。これは大体十万冊くらいあったと言われているんですけれども。確かに、そこにあったものは全く残っていないんですね。ですから、焼き尽くす、というのはやっぱりあったみたいですね。ただ、あともう一つ、焚書坑儒という、秦の始皇帝の時代に本を全部焼き尽くしたという話は、どうも研究によると伝説のようです。焚書坑儒といってすべて本を焼いたと言われていますが、実は全部焼いておらず必要な本は残しておいたということのようです。いろいろな言い方ありますけれども、戦によって本が焼かれていくというのは、中国の歴史の中ではものすごく大きな一つの事実になっているようです。

識名：ありがとうございました。

佐藤：どうもありがとうございます。それでは、時間がまいったようです。金曜の午後のひととき、大変楽しい時間を過ごすことができました。講師の先生方、どうもありがとうございました。会場の皆さんもどうもありがとうございました。これで、本日のシンポジウムを終わりたいと思います。